



筑紫女学園大学リポジット

筑紫女学園大学におけるガムラン活用
～「他文化理解」、「地域連携」、「ともいき」活
動のメディアとして～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 史子 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000028

筑紫女学園大学におけるガムラン活用
～「他文化理解」、「地域連携」、「ともいき」活動のメディアとして～

田 村 史 子

The Utilization of GAMELAN in Chikushi Jogakuen University:
Cross-Cultural Understanding, Regional Cooperation, and Symbiosis

Fumiko TAMURA

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第34号
2023年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 34
2023

筑紫女学園大学におけるガムラン活用 ～「他文化理解」、「地域連携」、「ともいき」活動のメディアとして～

田村 史子

The Utilization of GAMELAN in Chikushi Jogakuen University:
Cross-Cultural Understanding, Regional Cooperation, and Symbiosis

Fumiko TAMURA

はじめにー他文化理解・地域連携・ともいき

1999年10月、筑紫女学園大学文学部アジア文化学科の新設に伴い、アジアの文化を体験的に学ぶことを目的として、インドネシアのジャワ島中部地域から、大編成の **gamelan** / **ガムラン** が導入された。ガムランの楽器の選定、輸入・導入、実技指導、等は、同学科に新赴任した田村史子（当時は助教授）が担当した（注1）。学科の正規カリキュラム科目の中に取り入れられたほか、入学式などの大学公式行事での演奏や、学外向けワークショップ、演奏会、県内の小・中・高等学校での体験教室、などに活用された。ガムランは、多様な音楽文化を学ぶために、1972年、東京芸術大学の音楽学部楽理科に導入されたのを始めとして、各地の音楽大学などで用いられるようになっていた（注2）。しかし、一般大学に導入されるのは本学が初めての事であり、他文化を体験的に学ぶための画期的な教育活動として、各方面から注目を浴びた。日本で初めての命名となるアジア文化学科を創設し、体験的な教育方針を導入した当時の理事長（井浦順爾先生）を始めとする本学の経営・教学指導陣は、仏教大学としてのアジアの伝統文化に対する深い見識を示して、高い評価を受けられて当然といえよう。また、楽器の導入は本学後援会のバックアップによるものであり、事務方の方々からも多くの支援を受けた。大変貴重なことであった。

2004年、本学に隣接する場所に九州国立博物館がオープンするのに伴い、同様のガムランが導入された。本学科の教授・学生・卒業生などが、その導入・活用に関して連携・協力を行った。2005年6月、本学に「博物館と大学の新しい関係を考える協議会」が立ち上げられ（2006年11月、「博学連携準備委員会」としてレベルアップ改組）地域連携の可能性が模索された（注3）。当

委員会は発展解散したが、「日本文化の形成をアジア史的観点から見る」をコンセプトとし市民との共生を目指す同博物館と本学との地域連携は、双方の活動に利するものであり、アジア文化の理解の促進に資するものとして捉えられてきたといえよう。それは形を変えつつも現在まで続いていて、その要の一つとしてガムランの役割は大きいといえよう（注4）。また、本学と九州国立博物館のガムランの導入に当たっては、ジャワ島中部のスロカルト王家の楽団長であるサプトノ氏（注5）の全面的な協力を得て、日本とインドネシア間の真の地域連携が形を成した、と言っても過言ではない。

2008年11月、アジア文化学科と同時に新設された人間福祉学科と共に、設立10周年を記念して、本学において『音楽によるともいきの可能性』と銘打った、ガムランを中心に据えた公演が行われた。それまで福祉の世界で使われてきた「共生（きょうせい）」という概念を根底から捉え直し、仏教思想の中で古くから使われてきた「共生（ともいき）」に焦点を当てながら、「ともいき」と「きょうせい」を相互に補完しあう思想として再検討しようという試みであった。その中では、太宰府市内の障がいを持つ子供たちが同学の学生と共にガムランを演奏し、聴衆に感銘を与える、ということがあった。同学科は、正規カリキュラム内で、ガムランを用いてのミュージック・セラピーの試みを行っており、この演奏は子供たちとの長期に亙るセッションの成果を発表したものである。

さらに、2021年7月、本学の母体である浄土真宗の古刹、福岡市の浄満寺に、キャイ・トゥントルムという銘を持つ、本学、九州国立博物館所蔵のものと同様の様式と規模のガムランが有志から寄贈され、同年11月には、本学科主催の公開講座『音楽によるともいきの試み』が実施された。当公開講座は、2008年の『音楽によるともいきの可能性』をひきつぐものといえよう。それは、1999年以来、太宰府の地で、本学が積み重ねてきた、「他文化理解」、「地域連携」、「ともいき」、などの活動の集大成であり、福岡の中心に位置する当寺院から、新たな文化の波が広がることを期待するものであった。

本文は、上記のように、1999年から2020年の間に、太宰府市の筑紫女学園大学、九州国立博物館、福岡市の浄満寺という比較的隣接した場所に、大編成のガムランが導入された経緯の概略と、筑紫女学園大学におけるその活用・活動の内容を記し、今後の発展に資することを期するものである。

I. ジャワ島中部地域の大編成のガムラン、*gamelan gedhé*／ガムラン・グデ導入の経緯

上記三か所に導入されたのは、*gamelan gedhé*／ガムラン・グデと呼ばれる大編成のガムランセットである。ジャワ島中部の宮廷文化の中で完成されたもので、楽器編成の規模の大きさ、編成楽器の種類の多様性、音楽の完成度の高さ、合奏の音域の広さ（約50Herz～2500Herzにおよぶ）において際立った特徴を示しており、西洋のシンフォニー・オーケストラなどと並ぶ、世界有数の合奏音楽といえる。

17世紀のころから宮廷において集大成されたものであるが、現在は、広く一般に演奏され、宮廷の儀礼や村の祭り、人生儀礼に欠かせないものとして、ジャワの人々の生活を常に彩っている。また、全世界に愛好家が多く、音楽教育機関などに取り入れられ、ジャワの地域を超えた広がりを見せる。

1. ガムラン・グデとは

ガムランは、東南アジアのインドネシを中心とする地域で演奏されている合奏形態の音楽とその楽器群をさす最も一般的な呼称である。ゴングなどの銅合金製（青銅・真鍮など）の叩いて鳴らす楽器群を中心に、金属製の鍵盤楽器、太鼓、木琴、竹笛、胡弓、歌、などが組み合わせられ編成される。**gamelan** は、操る・打つ・叩く、などを意味する語 **gamel** / **ガムル** に接尾辞 **an** がついて構成された語であり、叩いて鳴らす楽器類を中心に編成された合奏形態を示唆する。

ガムランには、楽器編成、演奏様式、レパートリー、使用目的などにより、多くバリエーションがあり、ガムラン・パクルマタン（注6）、ガムラン・スカテン（注7）、などのように、ガムランの語のあとに、その特徴を表す語を付す。ガムラン・グデ、のグデは大きい、を意味し、それが大編成であり、立派であることを示している。



写真1：筑紫女学園大学所蔵ガムラン・グデー2022年6月18日、同学同窓会総会での演奏のためにセティングした状態のもの。ガムラン部、Pratiwi、卒業生、サブトノ、田村が演奏に参加。

2. ガムラン・グデの主要楽器編成

ガムラン・グデの楽器編成の中心を成す、青銅、真鍮などの銅合金製楽器類のうち、青銅製のものは、熱間鍛造（注8）によって作られ、真鍮製のものは、冷間鍛造（もしくは打ち出し）（注9）によって作られる。形状はおなじであるが、質感、音色に大きな違いがある。青銅の物が上

質であり、真鍮製のものは、より安価な代替品としての役割を持つ。当該の3セットのガムラン・グデはすべて青銅製の楽器を用いている。

ガムラン・グデの合奏は、(1) 青銅の楽器類、(2) 太鼓類、(3) 木の楽器類、(4) 弦鳴楽器類、(5) 気鳴楽器類、(6) 人の声、などを主要な編成要素とする。演奏される状況、楽曲の様式などにより、その組み合わせは異なり、それにより、演奏者数は、数人から40人ほどのバリエーションを見せる。以下に、主要編成楽器を示す。

(1) 青銅の楽器類

A. プンチョン (こぶ状突起を持つ物) いわゆる「ゴング類」

形状	a. ガントゥンガン (吊り物) 「吊りゴング」※			b. ブンドゥラン (丸い物) 「水平置きゴング」※			
				b-1 ブンドゥラン・グデ (大きい丸いもの)	b-2 ブンドゥラン・チレ (小さい丸い物)		
楽器名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
	gong ageng ゴング・アゲン	suwukan スウアン	kempul クンポル	kenong クノン	bonang barung ボナン・パロン	bonang panerus ボナン・パヌロス	ketuk & kempyang クト&クンピヤン

表 1 :

B. ウィラハン (板状の物) いわゆる「鍵盤楽器類」

楽器名	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
	slenthem スレントゥム	saron demung サロン・ドゥモン	saron barung サロン・パロン	saron peking サロン・ペキン	gendèr ゲンデル

表 2 :

※は田村の命名

(2) 太鼓類

- A. 樽型両面締太鼓 (注10) : ⑬ kendhang gedhé / クンダン・グデ
 ⑭ k.ketipung / クンダン・クティポン
 ⑮ k.ciblon / クンダン・チブロン

- B. 鋳打ち両面太鼓 (注11) : ⑯ bedhug / ブドッグ

(3) 木の楽器類

- A. ウィラハン・カユ (木片のもの) いわゆる「木琴」 : ⑰ gambang / ガンバン
 B. その他

(4) 弦鳴楽器類

- A. 2弦の擦弦楽器 : ⑱ rebab / ルバブ
 B. 多弦の撥弦楽器 siter / シトル

(5) 気鳴楽器類

竹笛：⑱ suling／スレン

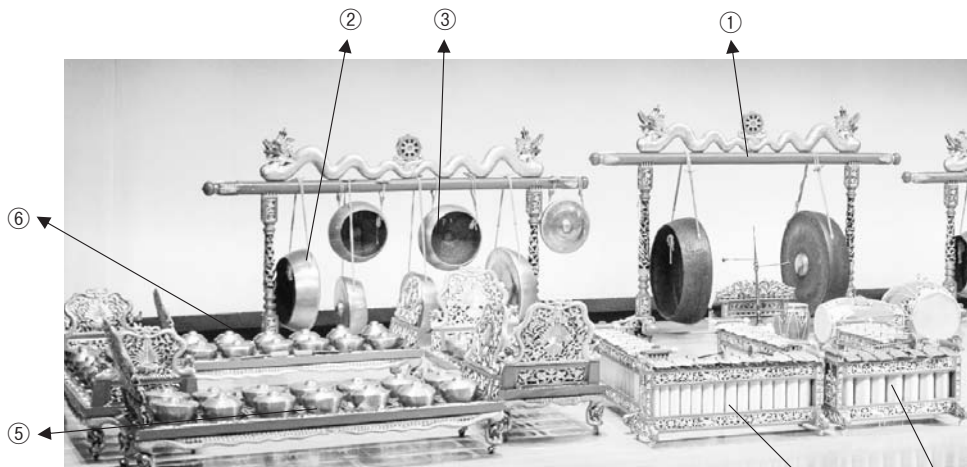


写真 2-1)

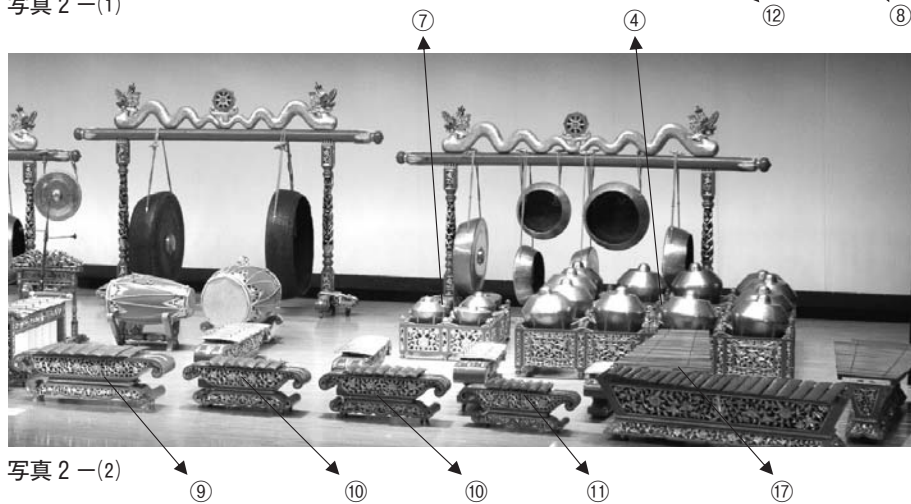


写真 2-2)

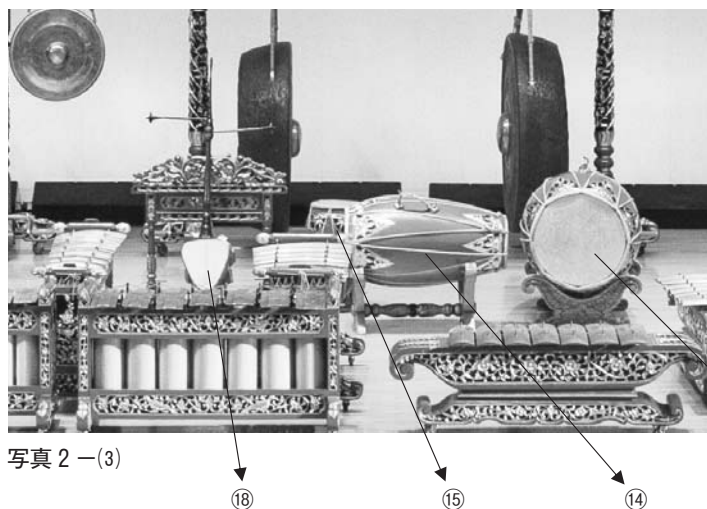


写真 2-3)



写真 2-4)
⑯ブドック

⑬

(筑紫女学園所蔵楽器)

「写真 2-1)~(4)・写真 3 中の○囲み数字は P 134~135 の楽器名に対応する」



写真3：左から ⑰ガンパン、⑲スレン、⑬クندان・グデ、⑱ルバブ、
⑧スレントウム、⑫グンデル
(スラカルタ市のガムラン演奏家たち)

3. 筑紫女学園大学ガムラン・グデ 編成楽器個数表

分類	楽器名	音階別			
		Slendro スレンドロ	Pelog ペロック	共通	
(1) 青銅の楽器類	A. Pencon／ブンチョン (こぶ状突起を持つ物) いわゆる『ゴング』類	Gong Ageng ゴング・アグン			2
		Suwukan スウアン	3	2	
		Kempul クンボル	5	5	
		Kenong クノン	5	6	
		Kethuk&Kempyang クト・クンピヤン	1	1	
		Bonang Barung ボナン・バロン	1	1	
		Bonang Panerus ボナン・パヌロス	1	1	
	B. Wilahan／ウィラハン (板状の物) いわゆる『鍵盤楽器』類	Saron Demung サロン・ドゥモン	2	2	
		Saron Barung サロン・バロン	4	4	
		Saron Peking サロン・プケン	2	2	
		Slenthem スレントウム	1	1	
		Gendèr Barung グンデル・バロン	1	2	
Gendèr Panerus グンデル・パヌロス	1	2			
(2) 太鼓類	A. 樽型両面締め太鼓	Kandhang Gedhé クندان・グデ			2
		Kwndhang Ketipung クندان・クティボン			2
		Kendhang Ciblon クندان・チブロン			2
B. 鋌打ち両面太鼓	Bedhug ブドッグ			1	
(3) 木の楽器類	A. Wilahan kayu／ウィラ ハン・カユ (木片の物) いわゆる『木琴』	Gambang ガンパン	1	2	
		B. その他	Keprak クブラ (リズム用木箱)		
(4) 弦鳴楽器	A. 2弦擦現楽器	Rebab ルバブ			2
	B. 多弦撥弦楽器	Siter シトル			1
(5) 気鳴楽器	竹笛	Suling スレン	1	1	

表3：

4. ガムラン・グデ導入の理由

上記三か所の教育および文化施設にジャワ島中部地域からガムラン・グデが導入されたのは、〔はじめに〕で述べた「他文化理解」、「地域連携」、「ともいき」、などの活動のメディアとして、大きく寄与するであろうことが予想されたからだ。それは、主として下記の二つの理由による。

その1は、当該の楽器を製造する技術が文化の中にしっかりと伝承されていて、その製造技術と流通の実態から、文化の伝承と経済活動の原則について学ぶことが出来ること。また、製造レベルの高い優れた楽器を日本に導入することが出来、必要に応じて、調律などのメンテナンスが可能であること（注12）。その2は、その音楽が固有の文化を反映する特徴的な要素を堅持しており、音楽・舞踊・文学などを含む総合芸術の要の役割を果たしていること。また、伝統を受け継ぐ優れた演奏家、指導者が活躍できる背景があり、さらに、それを学ぶことが出来るシステムがある、という点である。

(1) 楽器製造

上記三か所に導入されたガムラン・グデは中部ジャワ州のスラカルタ市及び隣接するモジョラバン郡で製造された。同地区は、数世紀にわたってガムランに用いられるような青銅の楽器を熱間鍛造する工房のアジアにおけるセンターとして機能し、現在まで稼働を続けている。（地図1）



地図1：東南アジアにおける『ゴング』製造のセンターとその流通のイメージ。

マンダレー、モジョラバン、ティヒンガンに、小～大型『ゴング』「熱間鍛造」のセンター、マンダレーとプノンペンに、小型『ゴング』「熱間鍛造」のセンター、フックェウに、中型「ゴング」「铸造」のセンターがある。「打ち出し」もしくは「冷間鍛造」は全域に分布する。矢印は、流通のイメージ。



写真4：モジョラバンにおける青銅製『ゴング』の熱間鍛造

次頁は、既述3組のガムラン・グデの製造場所、製造年、製造者である。

ガムランのセット	製造場所	製造年	製造者
本学所蔵	インドネシア、中部ジャワ州、スコハルジョ県、モジョラバン郡、ウィルン区	1999年	Sarojo kromopawiro サロジョ・クロモパ ウイロ
九州国立博物館所蔵	〃	2004年	〃
キャイ・トゥントルム	インドネシア、中部ジャワ州、スラカルタ市、パサル・クリウォン郡、ングブン村	1984年	Tentrem Sarwanto トゥントルム・サルワ ント

表4：

(2) 音楽的要素

ガムラン・グデの音楽的特性を以下のようないくつかの要素に分析することが出来よう。実際の演奏体験を通して、その理論やシステムを認識することは、当該の文化に関する深い理解に導かれる可能性を秘めている。また、その音楽の特質を通じて、人間精神に共通する本質的な事項の理解への道が開かれる可能性もあるだろう。

①生命の誕生—その豊かな響きと楽器の形は、宇宙と生命の誕生の時を感じさせる。

青銅の楽器類は、純度の高い銅と錫を混合・溶解した材料を鋳型に流し込んで作った元の型を、約750℃の高温まで繰り返し加熱しながら鍛造したものである。青銅は、薄く叩きのばされて組織が緻密化し、持続性のある豊かな響きと、美しい造形を生み出す。

②循環性—繰り返しめぐる自然のサイクルに同調しているかのような楽曲構造である。

その音楽は、一定の周期で曲の基本旋律が作られ、その周期が繰り返されるという循環的な構造を持っている。最低音の深々とした音色の大ゴングが、最後の拍で鳴らされて、周期をしるす。

③音階の枠組みの共通性—音楽を通じて人々の営みと感性が時空を通してつながっているのを感じることが出来る。

その音階には、スレンドロとペログという二つの異なった種類の五音音階が用いられる。五音音階は、一オクターブが基本的には5音で構成される音階で、西洋の7音の全音階（いわゆるドレミファソレシド）とは異なる枠組みである。スレンドロは日本の民謡音階に近いもので、韓国や中国でも同じような音階が用いられる。ペログは沖縄音階に近く、東南アジアからアフリカまでの広い地域で、同種の音階が用いられる。

④音を通じて人と人の柔らかな関係を生み出す。

その合奏では、個々の楽器が個性を競い合うのではなく、それぞれが役割を果たしながら互いに響きを重ねていく。大きい楽器ほど少ない音を鳴らし、より小さな楽器の細かな音の動きを支える。

⑤儀礼との関係—生と死の問題など人知を超えた問いに対して、音楽が認知のちからを与える。

その音楽の実施は、様々な通過儀礼や宗教儀礼に伴われることが多い。その響きは、深い精神世界に導く。

⑥学習過程—叩いて音を出す楽器がメインであることから、初心者比較的導入しやすい。

音楽をすることの基本的な喜びを感じることが出来る。そこから、音楽を持たない民族はいない、という真理を実感することが出来る。

Ⅱ. 筑紫女学園大学を中心とするガムラン・グデの活用・活動の内容

1. 概要

(1) ガムラン・グデ導入経緯

1999年4月、新設されたアジア文化学科にガムラン・グデが導入されることが決まり、楽器製造の優れた親方であるサロジョ氏に発注された。その製造は、発注があつてからすべて製造されるもので、完成には、短くとも半年を要する。順調に進んで、同年9月に完成し、田村と遠藤玄之氏(注13)が、ングランバン(ガムラン楽器セットの総仕上げチェックのための演奏。9-12)に立ち会うためにインドネシアを訪れた。その後、楽器は船便にて発送され、博多における複雑な通関の手続きの後、10月、筑紫女学園大学に無事搬入され、大学での活用が始まった。



写真5：中部ジャワモジョラバンでのングランバン

1999-11-30、東京からガムランと舞踊の演奏グループ「カルティカ&クスモ」を、インドネシアから演奏家と歌手、サプトノ氏とチュンダニ氏(注14)を招聘して、アクロスでお披露目公演が行われた。以下、当公演プログラムから当時の本学学長名本幹雄氏の挨拶文を引用する。

『本日公演が行われる「ジャワのガムランと舞踊」は、インドネシア・ジャワ島で四百年の歴史を持つスロカルト王家の儀礼の中心を占めてきた音楽と舞踊で、インドネシア文化の神髄であると言われています。本学にフル編成のガムランが導入されたことをご紹介します、それを寿ぐ意味での公演です。——ジャワのガムランの響きを舞踊は、きっと不思議な心地よい感動の世界へと皆さんを導き入れることでしょう。』

太宰府に設置が予定されている国立博物館と共に本学の「アジア文化学科」は将来アジア研究のメッカとして、アジアとの学術文化交流の拠点になることを期待しています。』

(2) カリキュラム内での活用

ガムランの実技とジャワ舞踊の実技、その文化的背景や言語について学ぶ内容が、アジア文化学科のカリキュラム中に正式に編入された。関連する科目の概略(年度による細かな変更などは省いてある)は以下のとおりである。また、より理解を深めるために、インドネシア研修旅行が、2000年9月に実施され、多くの学生が参加した。

a. 1999年度から2002年度までのカリキュラム

	1年次	2年次	3年次
演習科目	アジア文化基礎演習Ⅰ／Ⅱ	アジア文化演習（インドネシア）Ⅰ／Ⅱ	アジア文化演習（インドネシア）Ⅲ／Ⅳ
基幹科目		アジアの中のインドネシア文化	
		地域文化論（インドネシア）Ⅰ／Ⅱ	地域文化論（インドネシア）Ⅲ／Ⅳ

b. 2003年度から2019年度

	1年次	2年次	3年次
専攻基礎科目	アジア芸能史		
基幹科目	アジアの音楽と舞踊 アジア生活文化概論	音楽文化論	アジアの儀礼と祭り アジア民族音楽学
演習科目	基礎演習	体験・アジア音楽と舞踊	ミュージック・セラピー実習

c. 2020年度～

	1年次	2年次	3年次
専攻基礎科目	アジア芸能史		
基幹科目			アジア民族音楽学
演習科目	基礎演習	体験・アジア音楽と舞踊	

（3）カリキュラム以外でのガムランの活用と活動

a. 「他文化理解」と「地域連携」に関連する様々な活動

ガムランは、授業以外に、アジア文化の紹介を目的とする「他文化理解」に関連する様々な活動に用いられた。その活動に積極的に関わっていったのは、上記カリキュラム内の授業を履修し、ガムランの実技と文化的背景を学んだ学生たちであった。彼らを中心に、ガムランのサークル活動が始められ、2000年度には、ガムラン部が正式に結成された。その活動は、大きく、①学科主催公開講座と大学公式行事、②学外依頼の公演やワークショップ、に分けられる。①の公開講座は「ガムランワークショップ～みんなでアジアの音楽を演奏しよう」、というタイトルで、それが、異文化理解を促すものであることを明示している。

「地域連携」に関する活動としては、既述したように、2004年には、隣接する九州国立博物館に同様のガムランが導入され、同学科の教授・学生・卒業生などが、2006年度から、市民へのガムランワークショップ等の実施などを通じて、連携・協力を続けてきた。同ガムランワークショップは「博物館でジャワのガムランの演奏を体験～五感で知ろう、アジアの青銅楽器の魅力～」というタイトルで、アジア文化の理解の促進に資するものとして捉えられてきたといえる。

本学と博物館における公開講座はそれぞれ年間数回のペースで「コロナ禍」により一時停止される2019年度までつづけられ、通算4,000人以上の受講者があった。さらに、特記すべきは、両開講座に参加した人たちと本学の卒業生を中心としてガムランの演奏グループ、Pratiwi（プラティウイ）が結成されたことである。

b. 「ともいき」の視点の導入、

既述したように2003年度からの本学科のカリキュラムには、ガムランを用いての「ミュージック・セラピー実習」の授業が導入された（参照P10）。「音楽を通じてよりよい生を生きること」、「ともに響きあうこと」をテーマとして、様々な試みが行われた。なかでも、太宰府市の障がいを持つ子供たちの集うグループ「なかよしはうす」との共同は両者に多くの経験と成果をもたらした。その成果は、2008年11月に行われた公演『音楽によるともいきの可能性』の中で示された。また、「ミュージック・セラピー実習」の授業では、「ガムラン交流会」と名付けて、様々な障がいを持つ人たちと、ガムランをメディアとして、交流の試みを行った。

また、本学の南側に接する高雄山の森を、人とともにあった里山という視点で見なおすプロジェクトが進められ（注15）、その成果は「筑女の森マップ」としてまとめられた。ガムランの公開講座は、そのプロジェクトとコラボする形に発展し、2009年度から「ガムランワークショップー音楽と自然によるともいき」、と改名され、午前中はガムランの演奏、午後は森の探索、という組み合わせで実施された。その講師として、「地域環境計画九州支社」の、廣永輝彦氏、田中一男氏、等が参加した。さらに、本学主宰の公開講座全体のテーマが、「“ともいき”（共生）～あらゆる存在とのつながりの中で生かされていることへの目覚め～」と改められた。

c. 教育普及活動

各地の小・中・高校、また、「福岡県教育センター」、「福岡市文化芸術振興財団」などの文化行政機関の依頼により、ガムラン紹介とワークショップを数多く行った。田村がレクチャー、ガムラン部とPratiwiが演奏とワークショップを行う、というやり方が主であった。

2. 主なガムラン演奏・ワークショップ等活動記録

- ☆1. 『主催』として記述のないものは、本学・アジア文化学科の主催である
- ☆2. () 内に活動の場所の記述のない場合は、本学で行われたことを示している
- ☆3. [出演者]として記述がない場合は、ガムラン部及びプラティウイの活動である。
- ☆4. 本学及び九州国立博物館における定期的な公開講座・体験講座は、イタリックで表示した。これらの実施に関しては、田村史子が毎回講師を務め、ガムラン部、受講生、プラティウイのメンバーが補助に入るという体制で行った。外部から講師を招聘した場合は [] にそれを付記した。

1999	10- ガムラン到着 11-30 筑紫女学園大学新学科開設記念ジャワのガムランと舞踊のコンサート「アジアの響き」 (アクロス福岡イベントホール) [出演: カルティカ&クスモ、サブトノ、チュングニ、アジア文化 基礎演習受講生]
2000	3-18 第一回福岡市植物園蘭展 (福岡市植物園) 6-10 第33回紫友会総会演奏会 解説とデモンストレーションによる《ジャワ・ガムランの魅力》 7-15~16、10-14~15、11-11~12 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を演奏しよう [外部講師: 森岡真理子・佐々木美奈子・サブトノ] 11-10 第7回真宗保育学会大会での演奏 11-28 ジャワのガムランと舞踊のコンサート「精霊の楽舞」サブトノ来日公演 (福岡銀行本店大ホール) 11-29 太宰府高校生対象のワークショップ
2001	3-18 第二回福岡市植物園蘭展 (福岡市植物園) 6-16~17、10-14~15、11-11~12 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を演奏しよう 10-6 九州国立博物館着工記念シンポジウム『テレビ西日本・西日本新聞社主催』(IMS ホール) 12-15 ガムランサークル主催 ガムランミニコンサート
2002	3-18 第三回福岡市植物園蘭展 (福岡市植物園) 6-16~17、10-14~15、11-11~12 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を演奏しよう
2003	5-31~6-1、7-26~27、10-25~26、11-29~30 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音 楽を演奏しよう
2004	7-24~25、10-9~10、10-23~24、11-27~28 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を 演奏しよう
2005	5-15 九州国立博物館ガムランお披露目演奏会『九州国立博物館』(九州国立博物館) 5-31~6-1、10-25~26、11-29~30 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を演奏しよ う 7-15 文化芸術懇談会(九州国立博物館)での演奏 7-16 記念公演・シンポジウム「博物館と大学の新しい関係を目指して」でのデモンストレーション 12-20 ジャワのガムラン体験~五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力~『九州国立博物館』(九州国立博 物館)
2006	5-31~6-1、10-25~26、11-29~30 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を演奏しよ う 10-7、11、12 ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験~五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力 ~『九州国立博物館』(九州国立博物館) 11-10 福岡市中学音楽研究会県大会『福岡市中学音楽研究会』(福岡市立和白丘中学校) 12-12 ガムランコンサート—中部ジャワ地震(2005-5-27)被災者支援チャリティー
2007	1-20 ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験~五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力~『九 州国立博物館』(九州国立博物館) 5、6、7 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を演奏しよう
2008	5、6、7、9、10、11 ガムランワークショップ—みんなでアジアの音楽を演奏しよう ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験~五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力~(九 州国立博物館) 11-29 筑紫女学園大学アジア文化学科・人間福祉学科開設10周年記念特別公演「Living Together ~音楽 によるといよきの可能性~」 12-20 「アジア青銅楽器の花—ジャワのガムラン」、『太宰府キャンパスネット会議10周年記念事業』

2009	5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき 10-3 筑陽学園文化セミナー「ジャワ・ガムラン音楽～体感するジャワのガムランの魅力」(九州国立博物館研修室) 10-15 アジア学への招待「ジャワ宮廷舞踊の魅力」ヨグヤカルタからの来日、本学学生演奏補助 11-3 浄土真宗本願寺派九州地区仏教壮年会福岡大会での演奏と舞踊(福岡市国際会議場)
2010	5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力～(九州国立博物館) 6-18 芸術交流宅急便「ガムランのお話と演奏会、体験ワークショップ」『福岡市文化芸術振興財団主催』(福岡市立和白小学校) 9-17 アジア・フォーカス福岡国際映画祭オープニング演奏(エルガーラ) 10-16 浄土真宗太宰府市西正寺「降誕会」にて演奏 10-24 福岡市植物園フラワーコンサート 11-12 浄土真宗本願寺派益北組「お待ち受け法要」にて演奏(益城町文化会館)太宰府市西正寺 11-29 第2回 Pratiwi 発表会「千羽の鳥のおくりもの」
2011	ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力～(九州国立博物館) 5、6 ガムランワークショップー音楽によるともいき
2012	4-5 入学式での歓迎演奏 6-9 第45回紫友会総会演奏会 ガムラン響く～森の風景の中に 9-14 第23回福岡市アジア文化賞受賞記念・学校訪問 演奏・指導(福岡市立草ヶ江小学校) 9-15 第23回福岡市アジア文化賞受賞記念・市民フォーラム 演奏(アクロス福岡イベントホール) 9-16 〃 ・アジア文化サロン 指導と演奏(九州国立博物館)
2013	4-5 入学式での歓迎演奏 ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力～(九州国立博物館) 5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき
2014	4-6 入学式での歓迎演奏 ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力～(九州国立博物館) 5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき
2015	4-6 入学式での歓迎演奏 ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力～(九州国立博物館) 5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき 9-23 太宰府市の祭り「古都の光」での演奏(太宰府市役所前)
2016	4 入学式での歓迎演奏 ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力～(九博) 5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき 7-25 ガムラン交流会(福岡市立南福岡特別支援学校) 9-26 太宰府市の祭り「古都の光」での演奏(太宰府市観世音寺)

2017	4	入学式での歓迎演奏 4-29、6-25、10、11 ガムランワークショップ ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力～（九州国立博物館） 5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき
2018	4	入学式での歓迎演奏 5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき 12-10 ガムラン交流会（福岡県立高等視覚特別支援学校）
2019	4-4	入学式での歓迎演奏 5、6、10、11 ガムランワークショップー音楽によるともいき
2020	4	入学式での歓迎演奏〔特別出演 サプトノ〕
2021	4	入学式での歓迎演奏〔特別出演 サプトノ〕 11-27 公開講座「音楽によるともいきの試み」（福岡市地行 浄満寺門徒会館）
2022	4	入学式での歓迎演奏〔サプトノ〕 6-11 第55回紫友会総会演奏会ジャワのガムランコンサート「ガムランに歌の命」〔サプトノ〕 7-9 公開講座「アジア伝統音楽の展望」とガムランワークショップ 〔講師 田村史子・サプトノ・山本百合子〕 11-26 アジア文化体験講座 講演会「金印とガムラン～アジアの金属技術」とガムランワークショップ 〔講師 田村史子・遠藤喜代志・サプトノ〕 （福岡市地行 浄満寺門徒会館）
2023	4-4	入学式での歓迎演奏〔特別出演 サプトノ〕 7-8 アジア文化体験講座 講演会「アジアの伝統音楽と舞踊」とガムランワークショップ 〔講師 田村史子・サプトノ・山本百合子〕



写真6：ガムランによる音楽礼拝によって新学科開設の慶讃法要をお勤めしたー
《筑紫女学園大学新学科開設記念ジャワのガムランと舞踊のコンサート
「アジアの響き」1999-11-30（アクロス福岡イベントホール）にて》

活動記録写真集



入学式での歓迎演奏



アジア音楽演習の授業



ガムランワークショップー音楽と自然によともいき



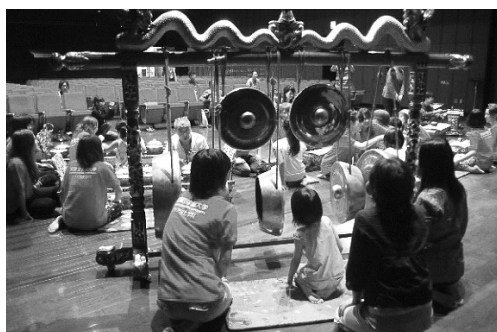
ガムランワークショップー音楽と自然によともいき



九州国立博物館におけるガムラン調律(サブトノとサロジヨ)



受講者にガムランの調律について説明するサブトノ



ジャワのガムラン体験～五感で知る、アジアの青銅楽器の魅力



第7回真宗保育学会での演奏

おわりに―理解・融合・共鳴

音楽は人の作り出す秩序である。どのような高さの間隔で音を並べるかによって旋律が生まれ、どのような時間の間隔で音を鳴らすかによってリズムが生まれ、その組み合わせによって、音楽の大きな秩序と調和が生まれる。人は、そのような秩序と調和をどこから感じ取り、学び、模倣したのだろうか。それは、宇宙と生命の、誕生・生成に関する、生類共通の記憶ではなかろうか。音楽が、国や民族や言葉の違いを超えて人々に感動を与えるのは、このような深い共通の記憶を基にして作られているからではなかろうか（注16）。ガムランの青銅楽器の豊かな響きの中に実際に身を置き、その音楽の秩序を実際に学ぶことによって、人は、生きていることの深い真理を感じ取ることが出来るだろう。民族や言葉の違いを超えて、人と人が分かりあえることの可能性を、それは示している。

一方、自然環境の違いは、音楽に異なった特徴を与える。例えば、段階的な四季の変化があり、日の長さが一年を通じて徐々に変化していく日本の人々が作り出した音楽と、雨季と乾季という二つの季節の交代からなり、一年を通して日の長さが大きく変化しない、インドネシアなどの赤道付近の国々の音楽が大きく異なるのは、当然なことではなかろうか。音楽は、言語のように翻訳することはできない。それを融合させるには、新しいころみが必要である。「ミュージックセラピー」の受講生であった原あかね（2008年度卒業生）は、障がいを持つ人たちとのガムランを用いての交流の中で、「なかよし」「おもいで」の2曲を、日本語を用いて作曲した。それらは、今も歌い継がれている。また、楽器の導入・調整、演奏指導などで、本学のガムランの活動に大きく貢献してきたサプトノ氏は、「コロナ禍」の3年間、福岡に居て、その体験を日本語による多くの作品にまとめ、本学において学生たちと共に演奏した。これらの例は、異文化融合の大きな試みであるといえよう。（注17）。

筑紫女学園大学の文学部アジア文化学科にインドネシアのジャワ島中部の大規模なガムラン・グデが教材として導入されて、23年経った。同学科の学生は、一年次の基礎演習で必ずガムランを体験する。また、本学の入学式では、シンフォニーオーケストラ、合唱に並んでガムランの演奏が行われる。延べ数万人の若い女性が、他文化を直接知る機会を得たことの意義は大きい。彼らが学ぶだけでなくそれを他者に伝えていくことをしてきたことにも、大きな意味があるだろう。また、本学と九州国立博物館で通算250回以上行われ延べ数千人が受講した体験講座の役割は、見逃せないだろう。音楽は空気の波であり、鼓膜から音の信号となって脳に認識される。しかしその波は、鼓膜だけでなく、人間の体全体を振動させ、そして、人間だけでなく、そこにあるすべての生物と非生物、目に見えるものと見えないものを、ともに振動させる。福岡の地にある3組のガムランが、引き続き演奏され、人と人を結び付ける力を持つことを、願う。また、真の意味での日本とインドネシアとの友好、さらに世界の平和の実現することを、願わざるを得ない。

注

1. 幼少からピアノを学んでいたが、高校生の時に民族音楽学者の小泉文夫の業績を知り、教えを受ける。東京芸術大学在学中の1973年から、日本人として初めてガムランを学ぶために、アメリカ、インドネシアに留学し、その研究と実践を続ける。1999年から2020年まで、本学に奉職。
2. 「子供の城」「沖縄県立芸術大学」「兵庫教育大学」「広島大学音楽教育学部」「東京音楽大学」「尚美学園大学」「昭和音楽大学」など
3. 当委員会は、本学の田村史子准教授、大津忠彦教授、小林知美講師、森田真也准教授、時里奉明准教授、中川正法文学部長（委員長）によって構成された。（当時の役職名による）。
4. 当博物館の博物館教育の要として用いられ、本学科の卒業生たちが、非常勤ではあるが、その実行にあたってきている。
5. ジャワの音楽界を代表する演奏家・作曲家。1979年から5年間東京芸術大学の客員教授としてガムランを教授、日本におけるガムラン普及の礎を作る。スロカルト王家楽団長、元インドネシア国立芸術大学教授。
6. ジャワ島中部のスロカルト王家において、重要な儀礼の際に用いられるガムラン
7. イスラムの大祭スカテンに用いられるガムラン
8. 銅と錫のみを原料とし、溶解した材料を鋳型に流し込んで作った元の型を、約750℃の高温まで繰り返し加熱しながら鍛造するもの。「田村史子・サプトノ・サロジョクロモパウイロ 2020」参照。
9. 「田村史子・サプトノ・サロジョクロモパウイロ 2020」参照。
10. 中をくりぬいた樽型の胴体の両面に皮を張った太鼓。皮は胴体に固定せず、両面に張り渡した紐によって固定する。調律は、紐の張具合によって行う。
11. 中をくりぬいた円柱形の胴体の両面に、釘、鋏、などで直接皮を固定する。調律は、皮の湿度を変化させることによって行う。
12. 2002年度、2007年度、2012年度、2017年度、2022年度の5回、現地から楽器製作者のサロジョ氏とガムラン演奏家のサプトノ氏を招聘してガムランの調律、楽器調整を行った。
13. 福津市正蓮寺ご住職。1999年当時は本学後援会理事として、ガムラン楽器完成を実見するために田村史子と共にインドネシアを訪れた。<http://wageon.x0.com/gamuran/index.htm>
14. ジャワ島中部のガムラン界を代表する女性の歌手。スロカルト王家の歌手の中心である。
15. 2011～2012「高雄山（大学背後の森）の歴史的・人間環境学的研究～〈いのち〉の循環を学ぶ教育の場として、また、地域との共生くともいき〉の場としての再生を目指して」、という研究課題で本学の特別研究助成を受けて調査を行った。田村史子准教授を代表とし、佐々木浩教授・森田真也准教授・森 弘子客員教授・廣永輝彦（株式会社地域環境計画）が参加した。
16. 「Blacking1973」
- 17-1. 2021年度本学公開講座「音楽によるともいきの試み2021-11-27」プログラムから、サプトノの言葉を引用する。～この2年間、全世界に猛威を振ったコロナは、私たちの心を乱し、平穩を奪った。その終焉を待ち続け心は倦んでいる。しかし、幸いなことに、日本には、線香を絶やさない多

くの寺院があり、平穩を願う人々の祈りがある。本年の春、私は深い願いを込めて、Korona Sumingkir と Korona Suminggah（日本名コロナすべ）を作詞作曲して発表した（※）。Sumingkir は「遠くに離れる」ことを、Suminggah は「戻ってくるのできないところになってしまう」ことを意味する。～（※） Korona Suminggah で検索してください。

17-2. 筑紫女学園大学第55回紫友会総会《演奏会》ジャワのガムランのコンサート～ガムランに“うた”の命～プログラムに、歌詞を収録。

文献

緒方知美

2009 「九博連携準備委員会2008年度活動報告」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第20号
ステイーヴン・ミズン 2006 「歌うネアンデルタール」熊谷淳子訳 早川書房

佐々木浩・田村史子・森田真也・森弘子・廣永輝彦

2013 「筑紫女学園大学の森「筑女の森」の生物相」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第24号

田村史子・サブトノ

2021 「中部ジャワの青銅楽器の合奏・ガムランの音高と音程構造～筑紫女学園大学所蔵のガムラン・グデを例として～」『筑紫女学園大学人間文化研究所年報』第32号 pp. 141-152

田村史子・サブトノ・サロジョクロモパウイロ

2020 「東南アジアの銅合金製楽器の製造と流通に関する体系的研究－その形と音（1）インドネシアにおける「熱間鍛造」技術による青銅製『ゴング』の製造と流通の状況」『人間文化研究所モノグラフシリーズ』第7号

田村史子

2017 「パンデ・ゴングソ：中部ジャワにおける熱間鍛造技術による青銅ゴング製造」『筑紫女学園大学人間文化研究所年報』第28号 pp. 171-186

田村史子・森弘子

2011 「太宰府高雄山の歴史的・人間環境学的研究～共生（ともいき）の視点から～」『人間文化研究所年報』第22号 pp. 47-64

田村史子・時里奉明

2006 「シンポジウム ようこそ！九州国立博物館〔会館〕－博物館と大学の新しい関係を目指して」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部国際文化研究所論叢』第17号

森田直也

2008 「九博連携準備委員会2007年度活動報告」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第19号
Blacking, J. 1973 *How Musical Is Man?* Seattle University of Washington Press

（たむら ふみこ：人間文化研究所 客員研究員）